

【翻刻と紹介】

二代立川焉馬撰『関取名勝図絵』

土屋 喜敬

はじめに

筆者はかつて、戯作者・浄瑠璃作者の二代立川（烏亭）焉馬（以下、焉馬）の相撲にまつわる作品について基礎的な考察を加え、江戸相撲とのかかわりを明らかにした¹。落語中興の祖として著名な初代と比べると、焉馬の評価は必ずしも高くはない。しかし焉馬の作品は、江戸時代後期における相撲興行の様相を伝えてくれていることもまた事実である。そこで本稿ではこれまで行われてこなかった『関取名勝図絵』を全文翻刻し、作品紹介を試みた。相撲史、文化史に寄与するところがあれば幸いである。

一 概要

翻刻の底本とした相撲博物館蔵本Aは、龍（上巻）・虎（下巻）の二巻二冊、焉馬撰・三代歌川豊国画により、弘化二年（一八四五）正月、南伝馬町一丁目の地本問屋頂恩堂・本屋又助により刊行された。弘化への改元は天保一五年（弘化元、一八四四）一二月に行われたため、図1のように扉には天保乙巳春と記され、刊記も天保一六年（弘化二、一八四五）乙巳正月である。書形は中本（法量一八・一×一二・二センチ



図1 『関取名勝図絵』扉

チメートル)、丁数は龍一六、虎一三。題簽には龍虎それぞれに「関取名勝図絵 龍」「関取名勝図絵 虎」とある。龍の冒頭に野田舎による序文があるが、虎に跋はない。尾題もないが、虎の末尾に「相撲名所図会二編 近刻」、同年に刊行された『当世相撲金剛伝』³の広告には「関取名所図会 全一冊追刻」とある。これらから『相撲名所図会』『関取名勝図会』とも称されていたことがわかる。

管見の限りだが、諸本については以下の通りである。相撲博物館蔵本Bは、龍虎を合冊し、題簽に後筆で「相撲名所図会 全」と記され、扉や刊行年を欠く。⁴相撲博物館蔵本Cは、虎のみで刊記によると弘化二年正月刊である。⁵東北大学附属図書館狩野文庫本は龍虎二巻二冊、扉には弘化二年、刊記には天保一四年(一八四三)稿成、天保一五年三月発行とある。⁶栃木県立図書館黒崎文庫本は弘化二年刊である。⁷そして国会図書館蔵本は嘉永二年(一八四九)の刊行だ。⁸

刊記から判断すると『関取名勝図絵』は、少なくとも天保一五年三月(狩野文庫本)、天保一六年正月(相撲博物館蔵本A)、弘化二年正月(相撲博物館蔵本C)、嘉永二年正月(国立国会図書館蔵本)の四種が存在し、何度か再刻がなされていたことがわかる。黒崎文庫本は未見だが、刊記は天保一六年か弘化二年のいずれかと思われる。狩野文庫本の天保一五年三月が最も早い。同書の扉には弘化二年春とある。また次章で紹介する収録力士のうち、秀の山雷五郎は天保一五年春の段階では岩見潟丈右衛門と称しており、改称するのは弘化二年春のことである。一方で同じく本文に登場する不知火諾右衛門は天保一五年春で土俵を退いている。以上から『関取名勝図絵』は、遅くとも天保一五年には出版の構想があり、弘化二年正月に刊行されたと考えたい。不知火は横綱を免許されており、土俵を退いてもなお興行の看板であったため収録されたのだろう。

図1の通り扉には作品名が大書され、右上に「相撲会所改」とある。相撲会所は相撲年寄により構成された興行を統括する組織のこと。相撲年寄が刊行に責任を持つてゐることを冒頭で示し、観客や読者の関心を高めた。序文からは魚市の町に住む野田舎のもとに集い、酒を呑みながら語った相撲年寄・阿武松緑之助や力士、焉馬、絵師・三代歌川豊国と版元の頂恩堂・本屋又助により刊行の運びとなったことがわかる。「春の頃に出せし金剛伝」は同じく焉馬撰で頂恩堂から刊行された『当世相撲金剛伝』のことで、当時評判を呼んでいたとある。序文であることは考慮が必要だが、『関取名勝図絵』は焉馬を中心に相撲年寄や絵師、版元の協業によつて成立したと言えよう。頂恩堂に序文を請われた野田舎については詳らかでないが、狂歌師あるいは戯作者であろうか。魚市の町に住むとあることから、日本橋界隈で活動した人物とも考えられる。

天保一四年から弘化二年は、不知火や秀の山が横綱土俵入りを披露し、大男・生月鯨太左衛門が登場するなど江戸相撲の画期であり、⁹初代歌川国貞が三代歌川豊国を襲名した時期でもある。この期に乗じて相撲にまつわる作品が数多く刊行され、その多くは焉馬によるものであった。¹⁰以下述べるように、そのなかでも異彩を放っているのが『関取名勝図絵』なのだ。

二 収録力士

収録力士は、龍冒頭の生月から虎末尾の不知火まで三九人を数える。内訳は龍が二人、虎が一八人であった。言うまでもないことだが、刊行時に番付表の上位に位置する当時の人気力士たちである。弘化二年春の番付表と比較すると、龍は二人の内東方が一八人、虎は一八人の内

一五人が西方の力士であった。概ね龍は東方、虎は西方の力士を収録していると言える。番付表に記された力士は計二七七人なので、収録力士はその内の一四パーセント程だ。江戸相撲には番付表に記されない力士も数多いため、実際の力士数に占める収録力士の割合は、一〇パーセントあるいはそれ未満であろう。また弘化二年春の番付表一段目は二五人で、すべての力士が登場する。二段目は番付表では七四人だが、収録されたのは一二人のみで、いずれも二段目の上位に位置している。『関取名勝図絵』に収録されたのは、まさに花形力士たちだったことがわかる。

収録順については、龍は興行の看板として別格的な存在であった生月を除くと、東方大関・剣山谷右衛門、関脇・武隈文右衛門、小結・鏡岩浜之助が描かれ、番付表の地位通りである。さらに前頭筆頭・小柳常吉、二枚目・友綱良助と続くが、それ以降は二段目の力士が先に配される場合もある。龍の収録順はある程度番付表の地位通りだが、必ずしもすべてではない。一方、虎の冒頭は西方前頭七枚目の千田川吉五郎で、番付表の地位とは関係なく配されている。末尾に横綱免許の不知火、その前に西大関・秀の山が登場する。以上、龍・虎の収録順を見ると、興行の看板を巻頭・巻軸に収録する役者評判記と同様の手法で制作されたものと考えられる。

本文を一読すると、力士たちを巧みに風景に例えて紹介していることがよくわかる。図2は東大関の剣山だが、阿波国第一の高山で、甘山の続きであること、峠に阿武松があり、鳴門を見おろす景色がよい、そして沖に岩があり、大船がぶつかると砕けるので人々は恐れて鰐石と呼んでいると説明されている。剣山は出身地の名峰から名乗ったもので、図2に描かれているのは鳴門の渦潮、そして相撲年寄・甘山重五郎の門弟であることがわかる。峠の阿武松とは、文政一年に横綱免許を受けた序にも登場する相撲年寄のことだ。剣山は甘山の没後、阿武松の門弟に



図2 『関取名勝図絵』より剣山



図3 『関取名勝図絵』より不知火

なっている。また人々が恐れていた鰐石は、かつて剣山が名乗っていた名だ。相撲の強さを表するため、鰐石を人々が恐れていたと記したものである。『関取名勝図絵』のみではややわかりにくい部分もあるが、同時期に刊行された『当世相撲金剛伝』¹³には「阿州 剣山谷右衛門 越中富山の産にして、甘山の門人也、阿武松の取り立なり、前より取る、初、鰐石文蔵、今、剣山と改名す、左りの最手役なり」と簡潔に記されており、あわせて読むことでより楽しむことができた。

鏡岩は人の面をうつす岩であると、しこ名の由来が紹介され、以前は虎家谷と名乗っていたとある。そして最後に雷の社の傍らにあると記されている。鏡岩は相撲年寄・雷権太夫の門人であったため、このように記されたものだ。千代ヶ嶽沢五郎にも雷の社とあり、友綱良助には社は玉垣と記されている。社は相撲年寄を例えたものだが、三章で再度述べたい。

荒馬吉五郎は「宮城野に生立し荒馬、舟橋を一字に渡り南部の国に至る」とある。荒馬の例は大変にわかりやすく、相撲年寄・宮城野馬五郎の門弟で、船橋、続いて一文字と名乗り、荒馬という古今の上馬、すなわち古今の名力士だと記されている。南部の国に至るとは、下総国船橋の出身であるが、八戸藩南部家の抱え相撲となったことを示す。これらの情報により、観客は相撲をより楽しむことができた。

そして巻軸は図3の不知火だ。二代吉田追風から横綱免許を受けた力士であるが、江戸相撲の番付表に登場するのは天保一五年春が最後であった。しかし横綱免許を受けた当時の第一人者であることに変わりはなく、『関取名勝図絵』の巻軸を飾っている。戸立野、濃錦里などしこ名の変遷が説明され、「浜辺横綱の社有り、祭礼春秋十日」と、横綱を社に例え、祭礼すなわち興行が春・秋一〇日宛である旨が記されている。図3にも飲食しながら名勝を楽しむ不知火、奥には「横綱の社」が見える。

以上、本文の例を紹介したが、『当世相撲金剛伝』の巻末広告には「関取名所図会 関取各の名のりを名所に見立たる風雅の面白キ草紙也」¹⁴と紹介されている。役者や遊女などを名所に見立てた作品は江戸時代中期以降数多く、新しい趣向とは言えない。それでも前述のように『関取名勝図絵』は何度が再刻されており、一定の需要があったことは確かだ。観客や読者は『関取名勝図絵』を手にすることで、より相撲興行を楽しむことができたであろう。

三 「大相撲場所之画図」の世界

巻頭の生月の次には図4「大相撲場所之画図」が掲載されている。この図は山や田圃、神社らしき建物が描かれた村落の様相だが、力士は一切登場しない。しかしよく見ると、太鼓櫓・木戸関・土俵山など相撲場にまつわる記述があることに気づく。巻軸の不知火の次頁から本文を一読すると、図4は、相撲場の風景を山や田圃などに見立てて巧み描いたものであることがわかる。周知の通り、相撲場を描いた錦絵は数多いが、本稿では一例として『関取名勝図絵』刊行前年にあたる天保一五年の歌川国貞（初代）による図5「勧進大相撲興行図」¹⁵を掲載した。図4と比較しながらご覧いただきたい。位置関係だと図4と図5はちょうど天地が反対になっている。図5のような錦絵の作品は数多いが、相撲場の様相を伝える文献史料は限られる。風景に例えられているものの、図4の情景を説明する虎巻末の記述は大変貴重だ。以下、図4の情景を巻末の記述とともに詳述するが、筆者が『関取名勝図絵』は、単なる力士名鑑にとどまらない異彩を放つ作品であると紹介した所以はここにある。

図4の右下に建つのが太鼓櫓だ。相撲や歌舞伎の興行地に設けられる

櫓は、幕府より興行が許されたことを示す象徴であり、重要な意味を持つ。後述するように、図4には、土俵山、棧敷ヶ嶽など、風景に模して相撲場が描かれているが、太鼓櫓は相撲場そのままである。興行許可の象徴である櫓を配して相撲の絵であることを示したものとも考えられる。

正七時から夕七つまで、天下泰平と国土安全を願って打つと説明されている。早朝四時から夕方四時まで間断なく打ち続けていたわけではないが、興行開始時や関取の場所入り、興行終了時などに太鼓の音が鳴り響いた。現在は興行開始時の寄太鼓と、終了時のね太鼓を呼出しが奏でている。太鼓櫓の麓には庵があり、取組の札が掲げられた。これは現在も目にする板番付や取組を周知する顔触のことだ。

本文には、興行初日前日に町々へ出る五柄太鼓も紹介されている。これは現在も初日前日に町を歩く触太鼓のことだ。五柄太鼓は、江戸・深川・品川・浅草・四ッ谷と地名を冠しており、門前町や宿場町など江戸の繁華街に相撲がはじまることを知らせた。江戸太鼓は日本橋周辺を触れ歩いた。

太鼓櫓を左に向かうと大札場・新札場が見える。ここで木戸札・木戸銭を管理した。大札場には相撲年寄や、同じく相撲年寄で帳元の三河屋治右衛門が出勤し、棧敷方・土間方と呼ばれる人々に切手を出した。ここでは切手と称しているが、木戸札のことである。晴天札を持つ観客は、ここで切手と替えることができた。晴天札は興行期間を通じて利用できる入場券のようなものと考えられ、観客は新札場で切手と交換した。新札場は観客に切手を販売する場所である。大札場・新札場と木戸関の向かい側には棧敷字里（売り）・土間字里（売り）がある。これらについては本文に記述がないが、木戸の前に軒を連ねていた入場券や飲食物を取り扱った相撲茶屋のことと思われる。

切手を持った観客が必ず通るのが、木戸関だ。相撲年寄が出役し、堅

固で切手を持たないものはひとりも通さなかった。貞享二年（一六八五）、相撲年寄仲間は木戸に仲間以外の素人をひとりも置かないことや、木戸での飲酒は法度であると定めている。⁽¹⁶⁾江戸時代には、後述するよう無銭での不法入場者も少なくなかったと思われる、相撲年寄が出役して木戸で厳重に取り締まった。また裏木戸と呼ばれる出口もあり、相撲年寄ひとりが詰め、退場する場合のみ通ることができた。

なお明治一〇年（一八七七）に來日したエドワード・シルベスター・モースは、回向院で相撲を見物しており、木戸札は、長さ七インチ（一七・八センチ）・幅二インチ半（六・四センチ）・厚さ半インチ（一・三センチ）と記録している。⁽¹⁷⁾しかしモースの記述を除くと、木戸札については、大札と小札の別があったことなど断片的にしかわかっていないので、稿を改めて検討したい。

木戸関は、おやく（御役）山の麓にある。図5中央後方に描かれている如く、興行中に神社奉行所から相撲場に派遣される大検使・小検使のための見物席だ。図5のような木戸の上で見分する検使の席が描かれた錦絵の作品も数多い。

右に進むと水が湧き出す井戸が現れ、面白井とある。次に述べる土俵山の下にあることから、取組そのもの、あるいは見物を面白がる観客のことを示すのであろう。本文には稽古堂の記述があり、相撲年寄の家、すなわち相撲部屋での稽古を紹介しているが、図4の範囲外となる。力士は関鳥（関取）・前鳥（前取）と鳥に例えられている。清めの塩や力水を用いること、八幡大菩薩を祀り、土俵中央の砂山の頂に幣を立てると描いている。「張合井 面白井 あせの水わき出る事おびたし、火の出ることあり」とあることから面白井の湧き出る水も、汗のことかもしれない。

面白井を通り過ぎて右に向かうと畳加田・棧敷加田・土間加田と呼ば

れる田圃が広がる。それぞれ畳方・棧敷方・土間方と呼ばれる人々のことである。田圃が広がる風景は、客席を示すもので、「此田のくろにはたら木多く繁る」とあり、田圃の畔、すなわち客席の間で畳方らが多く控えていると描写する。観客を相手に渡世を営む人々の様子が想起される。また本文には、吞太蠟という蠟燭を商うものが多いとある。吞太郎は、一般には芝居などを無銭で見物する人のことを指すが、力士を呼び上げる呼出しを意味する場合もあった。⁽¹⁸⁾ここでは後者すなわち呼出しのことを例えているのであろう。小咄ではあるものの無銭で相撲場への入場を試みる人物は、安永元年（一七七二）刊の『鹿の子餅』に収録された「角力場」にも滑稽に描かれている。⁽¹⁹⁾相撲会所にとっては悩ましい存在ではあるが、こうした人々も相撲場の名物であったようだ。

面白井から田圃の反対、左に向かうと中売の里にたどり着く。本文では中売村だ。この村の名物は弁当・寿司・酒・するめ・蒲鉾・果物。観客が観戦中に楽しむための飲食物を商う中売と呼ばれる人々のことである。中売は、手ぬぐいをかぶり、たすきをかけ、観客の肩を踏んで商いをしたという。図5の左右手前側にも中売らしき人物が描かれている。観客の間を忙しく動きまわる人々、そして相撲を見ながら酒や寿司を楽しむ観客の姿が目につく。先の棧敷方などは客席も取り扱っていたと思われるが、中売は専ら飲食物を売り歩いた。

図4中央に描かれているのが土俵山だ。図5にも大きく描かれているように相撲場の中心で、力士たちが熱戦を繰り広げる舞台が土俵である。まず本文には『日本書紀』に登場する相撲の神・野見宿祢を祀っていると記されている。続けて寛永元年（一六二四）に明石志賀之助が晴天六日の勧進相撲を創始し、中断を経て雷が中興の祖であると続く。続けて安永七年（一七七八）に興行日数が一〇日となったとある。寛永元年に始まった点の真偽は別として、⁽²⁰⁾貞享元年（一六八四）に相撲年寄・雷に

より再興したことや、安永七年に晴天八日間が二日延びて一〇日間になったことなど、相撲の歴史がわかる内容になっている。そして「祭礼十日」とある通り、相撲興行は野見宿祢をはじめとする神々を天から招いて催す祭礼なのだ。最後に山すなわち土俵の高さは三尺（約九一センチ）、土俵のまわりは三間（約五メートル四五センチ）四方と説明されている。

現在、日本相撲協会の『相撲規則』では、公開される土俵の高さは三四〇センチと定められ、本場所の取組は、高さ約六〇センチの土俵で行われている。本文の通りだとすると、江戸時代末期の土俵は現在よりも三〇センチ程高かったことになる。今後事例収集が必要だが、土俵の高さや広さに関する史料は少ないため、貴重な記述である。

図4には描かれていないが、図5の通り、土俵の上には四本柱に支えられた屋形が設けられる。本文では土俵山の次に四季の柱として四方の隅に四色の絹が巻かれた柱のことが説明され、東西に役柱と筆頭の宮・筆脇の宮があると記されている。本文は四神の柱と続き、東西南北の四方を守る神々が登場する。躰口すなわち四方の土俵の入口の俵にはそれぞれ、右は青龍神、左は白虎神、前は朱雀神、後は玄龜神、残りの一二俵は子から亥の十二支が祀られているという。躰口は通常、茶室の小さな入口を意味するが、ここでは土俵の入口を指して用いられている。円を形成する俵は計一六であったことがわかる。なお四本柱は昭和二十七年（一九五二）に撤廃され、屋形は天井から吊られることになった。柱に巻かれていた青・白・赤・黒の四色は、屋形に上げられる房が表している。柱や房には方角・季節・神・色の意味があり、先の右が東・春・青龍神・青、左が西・秋・白虎神・白、前が南・夏・朱雀神・赤、後が北・冬・玄龜神・黒である。

土俵山には中改の関・筆頭宮・筆脇社が描かれている。中改は土俵上で柱の前に座って取組を見つめる相撲年寄のこと。図4・図5と本文か

ら東西にある役柱の前に中改が陣取っていたことがわかる。また筆頭・筆脇は相撲会所の重鎮で、相撲年寄がつとめた。社や宮に例えられており、重要な役職であったことがうかがえる。相撲年寄は興行を取り仕切っていた中心人物なので、図4でも村落の結節点でもある社であったのだ。

役柱については本文に三役の宮として説明が続き、上部に八幡幣、柱に弓・矢・弦が取り付けられていたことがわかる。『関取名勝図絵』刊行時は、矢のかわりに扇であったという。これらの品々は、現在も千秋楽結び三番・是より三役の勝者に与えられるもので、江戸時代には柱に取り付けられていた。また土俵山の中央には八幡の幣立とあり、野見宿祢や四神をはじめとする土俵に祀られる神々が宿る社が描かれている。興行初日の前日に催される土俵祭を模したものとも考えられよう。

本文は二十八宿の宮へと続く。土俵の円の外縁には四角で囲うように俵が埋められる。柱と柱の間には七俵ずつ、合計で二八俵が用いられていた。さらに土俵山の麓には力水の井戸があり、化粧紙が降り積もり、力神（力紙）が安置されていると説明する。これらは現在も力士が取組前に使用する力水・力紙のことだ。

図4には描かれていないが、本文には土俵下に力士や行司が控える相撲溜里（溜まり）・行司溜里（溜まり）の説明がある。土俵山の東西にあり「すまひ鳥（相撲取）勝木に集居る」と記す。続けて「しこ踏石塵手洗 立合の辻」という古跡があると続き、取組前の所作であるしこや塵浄水、取組開始時の立合は古くから行われているとある。名物として「まとふ梨 ひき桐」とあり、解釈が難しいが、相撲の技のことと思われる。

行司についても、袴で出勤することや、欠かすことのできない軍配団扇、決着がつかない場合の水入りなどが説明されている。袴や足袋は行司の出で立ちのことで、「中ぬき」は中抜き草履のことであろう。また

行司が控える行司部谷（部屋）は、図4の左上に谷として描かれている。

本文には行司部屋の記述がないが、棧敷の後方にあったようだ。また力士の支度部屋は図4に描かれていないが、行司部屋同様、谷に例えられ棧敷ケ嶽の後方にあり、関鳥（関取）が群がる谷だという。

土俵の右手に広がる田圃の上には板元山がそびえ立っている。本文では板木部屋に帳元山として紹介されており、同じものである。その麓にあるのが板木部屋で「三河屋と云ふ板木の桜多し」とあり、名物は番漬（付）・勝負漬（付）であった。先に述べた三河屋が、興行には欠かせない番付や、勝負結果を記した勝負付を板行していたことがわかる。

番付表に名が載らない前鳥（取）は、群がって勝負漬（付）を争っていたという。勝負付は一日の興行終了後に勝負付売りによって市中で販売された⁽²¹⁾。勝負結果は観客以外の関心も高かったようだ。また三河屋は帳元という役職であったが山に例えられており、相撲会所の重職であったことがわかる。

帳元山のさらに上、図4の左右に広がるのが棧敷ケ嶽だ。ここは相撲場を囲むように設えられた観客席・棧敷のことである。相撲場の観客席は棧敷と土間に大別される。図4の田圃に相当するが、本文には土間の海として「棧敷ケ嶽の禁より土俵山の禁迄一面の海なり、見物浪を打也」とその様子を伝える。説明は不要であろう。土間は土俵をとりまく観客席で、波を打つように多くの観客が土俵上の取組を楽しんだ。大入の時は、本中鳥（取）と呼ばれる番付表に名が乗らない下位の力士たちが観客を制することもあった。

さて棧敷は、土俵や土間を取り囲むように設えられていたが、ここでも観客が取組に熱狂した。先のモースは棧敷一軒の広さを六フィート（一・八メートル）四方と語る⁽²²⁾。四人での観戦を基本とする現在の升席よりも広く、六人八人でも見物することができた。

本文には「見物山をなして勝角力に衣類の花をちら」して雷のように

手を打って悦ぶと描写されている。衣類の花を散らす行為は「投げ纏頭」と呼ばれるものだ。鼯鼠にしている力士が勝った際、観客は自身の名を記した羽織などを土俵に向かって投げる。衣類などは力士の付け人や呼出しが回収し、後で投げ入れた本人に届けると、そこでご祝儀が贈られた。この慣習は明治四二年（一九〇九）に禁止されるまで続いた。

『江戸繁昌記』にも「各々物を抛ちて纏頭と為す。自家の衣着、淨々投げ尽して甚だし⁽²³⁾」とあり、「晴天に 御免の日数 花かふり」「寒ムさうな 人に関取 礼を言イ⁽²⁴⁾」など、川柳の題材にもなっており、投げ纏頭は相撲場の名物として知られていた。

おわりに

江戸時代後期、江戸での大規模な相撲興行は、原則春・冬二度の開催であった。相撲場は興行のたびに出現し、建物は相撲小屋と呼ばれ、竹矢来葦簾張り、二層の棧敷で設えられていた。嘉永四年（一八五二）春および慶応三年（一八六七）夏の例であるが、回向院の相撲小屋は、間口一八間（三二・七メートル）・奥行二〇間（三六・四メートル）で約四〇〇坪（約一一九〇平方メートル）程の限られた空間であった⁽²⁵⁾。しかし『関取名勝図絵』で描写されたように、そこは山々、社、田圃に例えられる程豊かな世界で、二章で紹介した力士をはじめ、行司、相撲年寄、そして相撲場を埋め尽くす観客が暮らす無限の広がりを見せる祝祭空間だったのだ。

さて最後に焉馬について付言しておきたい。焉馬は相撲にまつわる作品を数多く残しただけでなく、吉田追風に相撲を習い、行司・式守鬼一

郎と同一人物であるともいわれている⁽²⁶⁾。しかし岩本活東子の『戯作者小伝』や仮名垣魯文の『稗史年代記』には、焉馬が吉田追風に行司の技を習ったこと、あるいは一度土俵に出たと紹介されているものの、焉馬が式守鬼一郎その人であるとは記されていない⁽²⁷⁾。また焉馬と同時代の式守鬼一郎は二代目（後の六代式守伊之助）か三代目（後の七代式守伊之助）が該当するが、両者とも焉馬と没年月日が一致しない⁽²⁸⁾。戯作者が行司だったとする大変に興味深い説ではあるものの、この件に関しては性急に結論を出さず、なお史料を渉獵することにした。

註

- (1) 拙稿「二代立川焉馬と江戸相撲」（『相撲博物館紀要』第一五号、二〇一七年）。川本勉「戯作者が見た江戸後期の相撲 立川焉馬の著した相撲関係資料」（『国立国会図書館月報』六八七・六八八、二〇一八年）でも作品が紹介されている。
- (2) 資料番号歴〇一二二七。龍・虎が合冊されて一冊となっている。
- (3) 相撲博物館蔵、資料番号歴〇一一六九・歴〇一一七〇。弘化二年の刊行だが、収録された力士は天保一四年冬の番付表に基づく。
- (4) 資料番号歴〇一二二六。
- (5) 資料番号歴〇一二二九。
- (6) 東北大学総合知デジタルアーカイブホームページ (<https://ouda.tohoku.ac.jp/portal/>)、デジタル請求記号DIG-T H K K - 〇一七九七。
- (7) K七八八二。
- (8) 請求記号二〇九一二四。
- (9) 拙稿「弘化期における江戸相撲の動向」（『相撲博物館紀要』第八号、二〇〇九年）。
- (10) 註（一）拙稿。

- (11) 相撲博物館蔵、資料番号番〇〇三七八。
- (12) 註（九）に同じ。
- (13) 註（三）に同じ。
- (14) 註（三）に同じ。
- (15) 相撲博物館蔵、資料番号美〇〇七二二。
- (16) 『勸進相撲願控』（筆写本）。
- (17) 石川欣一訳『東洋文庫一七一 日本その日その日』（平凡社、一九七〇年）一五―一八頁。
- (18) 澤田一矢編『大相撲の事典』（東京堂出版、一九九五年）一五六頁。かつて呼出しは、自身に一〇枚与えられる相撲場に入場できる通券を現金化し、酒食の費用としていた。このことから呼出しは「のん太郎」と呼ばれたという。
- (19) 武藤禎夫編『嚙本大系 第九巻』（東京堂出版、一九七九年）一六頁。小咄の内容は拙稿「近世の小咄に描かれた相撲」『嚙本大系』を素材として（『相撲博物館紀要』第二〇号、二〇二二年）で紹介した。
- (20) 中村弘『日下開山 初代横綱 明石志賀之助 すもうの街宇都宮が生んだ大力士』（随想舎、二〇一二年）で実在が明らかになった。しかし明石が実在したのは寛文年間（一六六一―一六七三）頃であり、寛永元年に勸進相撲を創始した点は虚飾である。
- (21) 宇佐美英機校訂 喜多川守貞著『岩波文庫 近世風俗志（守貞謄稿）一』（岩波書店、一九九六年）二七二―二七三頁。
- (22) 註（一七）に同じ。
- (23) 日野龍夫校注『新日本古典文学大系一〇〇 江戸繁昌記 柳橋新誌』（岩波書店、一九八九年）六頁。
- (24) このほかにも投げ纏頭の川柳は数多い。詳しくは拙稿「『誹風柳多留』と江戸の相撲」（『相撲博物館紀要』第二六号、二〇一八年）を参照されたい。
- (25) 拙稿「近世後期の相撲興行と両国地域」（『東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『東京都江戸東京博物館調査報告書第二四集 両国地域の歴史と文化』東京都・東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館、二〇一一年）。

(26)『日本百科大辞典 第六卷』(三省堂書店、一九二二年) 九六四頁など。
(27) 註(1) 拙稿。

(28)「相撲」編集部編『大相撲人物大事典』(ベースボール・マガジン社、二〇〇二年) 六九二～六九四、七〇四頁。

〔付記〕

本稿には今日においては不適切と思われる用語も含まれておりますが、江戸時代の文化をテーマにしているためそのまま表記しました。

《翻刻》

凡例

- 一 原則として新字体によったが、特別なものには旧字体を用いた。
- 二 変体仮名は現行の平仮名で表記した。助詞の江(え)・而(て)・ニ(に)・与(と)・者(は)・茂(も)は、そのまま表記し、小字を用いた。合字の「夕」もそのまま表記した。
- 三 欠字・平出・抬頭はそのまま表記した。
- 四 読み点(ゝ) 並列点(・) を補った。
- 五 誤字は(ママ)(脱力)、推定した文字は(〇〇カ)と註記した。虫損・墨損などの註記も() を付して示した。
- 六 解説できない部分は□、字数も不明の場合は「」で示した。

(表紙)

(題簽)

「関取名勝図絵 龍」

(見返し)

相撲
会所改

関取

名勝図絵

天保乙巳春

立川焉馬 撰
歌川豊国 画

ひと日、阿武の松ぬし最手助手の人々をともしなひてわか庵に来れるに、やかて立川のうし歌川のあるし頂恩堂さへいさなひて来ませり、はからすも雷名のうしの、かくつとひたまふは、うへなきさちにこそあれとて、ひとつらに居ならひて、酒うち吞つ、此座にあらむかきりハ兄弟のおもひをなせりなといひて、ともにかたらひつ、頂恩堂のあるしいひ出けるは、君達も知らせ給ふことく、春の頃に出せし金剛伝ハいみじきあたりをなして、数計なく出て目覚るまでにおほえ候そ、いてや此庭に居ます最手助手のうし達はさらなり、かみつかたの角力人をもらすことなく、例の立川歌川両うしの筆をもて関取名所図会と上書なしたる摺巻をものしてよとあるに、庭につらなる人々の限り、こはよくも思ひ立たまふ物かなとせよかくせよとて、はてはおのれに序をさへ書てよと、立川うし

のひたすらにすゝめたまふを、余りにいなまむはをこの業、めなき口縄のものにおそれぬさまをなしつゝ、めくらめつぼう向ふミすおしのつよさに跡へは引す、先初切の飛入に筆をヒツキル事しかり

魚市の町に住

野田舎（花押）

生月鯨太左衛門

肥前国平戸の産、身の丈七尺五寸、重サ四十五貫目、当辰ノ十八歳、大坂ハ小野川嘉平次、江戸ハ玉垣勘三郎門人也、永禄（元禄）の頃鬼勝象之助、身の丈七尺八寸、又明和年中に釈迦ヶ嶽雲右衛門、身の丈七尺四寸五分、寛永元甲子年勸進相撲開基より天保の今に至るまで、七尺に余る大男右三人の外ニなし、古今の力士といふべし

生属は 古今の力士 世の中に 並ぶかたなき 男なりけり

大相撲場所之画図（画中の文字は略）

剣山

剣山あしうは阿州第一の高山かうざんにして、甘山のつゞき也、峠たうげにハ阿武松あり、鳴門を見おろす景色けしきよし、沖中に岩あり、大船是に当ればたちまちくだけるなり、人々おそれて鰐石わにいしと呼べり

武隈

武隈ここんの松ハ古今の大木也、阿武松にならふと云、はるかに勇山見ゆる、麓ふもとニハ小柳多し、左に手柄山、湖東山見ゆる、都御幸野に有しを東都へ根越せし松なりといふ

鏡岩

越後国和田の浦の浜はまつゝきに有り、鏡岩とて人の面おもてをうつすによくうつるといへり、いにしへ虎家谷より出し小石かく大石とハなりぬ、雷いかづちの社かたはらにあり

小柳

小柳ハ今阿州あしうニあり、古今の大木也、太サ三人にて廻すに余れりと云ふ、左りに緑松多し、阿武松の種たねなりといへり

手柄山

友綱

友綱やしろの社ハ日向の国荒木野に有り、神代かみよのむかし岩ノ戸開けて後千田川といふ大河より出しと云ふ、社ハ玉垣の内に有、小田原蝶と云てふ、舞遊まいあそぶことあり、むかふハ播州姫路より浦風吹つ、く所ところニて、待乳山・兜山を打越して一段高く見ゆるを手柄山と云

相生

千代ヶ嶽

相生の松ハ播州高砂の浦うみニ有り、浦風に生立し松なり、いにしへ国分の塚有といふ、境川の流にそふ千代ヶ嶽、向ふに見ゆる麓ふもとにいろは野あり、戸々の浦へ出る近道あり、峰みねニ雷の社あり

関の戸

関の戸ハ仙台^{せんたい}にあり、達ヶ関といふ左^{ひだり}に藤川有^{あり}り、御所浦^{おつ}へ落^おる早瀬^{はやせ}也

要石

縄張

要石ハ古^{いにし}へ都御幸野^{みやこ}有^ありしト云、今東都^{いまとうと}有^あり阿武松のかたはら^た立^たつ秀ノ山の禁都川^{ふもと}をへだてし古城^{こじやう}の跡^{あと}なり、名将^{めいしやう}の縄張ト云ふ

頂

常山

常山ハ羽州^{うしう}の名山^{めいざん}也、左りに鶴ヶ嶽有^{あり}り、雷^{いかづち}鳴出んとする時、砂^{いさご}を吹上^{ふきあ}る事おひたし、人々^{これ}是^{これ}を鶴ヶ嶽の雲珠卷^{うずまき}ト云ふ雲州雲早山^{うんしう}の頂^{いたき}なり、見わたせば鼓ヶ滝、沖ノ島まで見ゆる、伊勢の海に有とぞ

雲早山

音羽山

音羽山ハ都第一^{みやこ}の景山^{けいざん}也、左りに楯の峰有^{あり}り、照渡りたる日にハ伊吹島^{はな}・象ヶ鼻^{ぞう}・笹ヶ島・十万ノ海まで見ゆる阿州^{あしう}の方^{かた}当^{あた}つて雲早山見ゆる、左りに矢筈山有^{あり}り、大坂湊境川迄見ゆると云ふ

尾上

太孝山

白山ハ尾州^{びしう}蔦郡^{ふし}有^{あり}り、はるか高砂^{こうさ}の浦尾上^{うらそのへ}の鐘^{かね}、禁^{ふもと}には和田ヶ原あり太孝山ハ越中富山のつゞきなり、峠^と二本松あり

武蔵野

桂野

桂野^{かつらの}ハ武蔵野^{むさしの}のつゞきなり、桂野^{かつらの}ハ月見山あり、武蔵野にハ神田川あり、武蔵川の門下なり

浪渡

此所ハ関谷野^{すへ}の末^{すへ}にして、五十嵐つよき故、浪の音高^{たか}し、丸亀^{まるかめ}といふ亀すむ、昔^{むかし}、磯ヶ浜といふ所より勇獅子といふ獣^{けもの}雷^{いかづち}に附て飛出^{とびいで}、此所を渡りしゆゑ、今浪渡りといふ

(表紙)

「

(題簽)

「関取名勝図絵 虎」

」

千田川

越ノ海よりはるかに三つ島見ゆる、左りに書写ヶ嶽あり、昔大童子出^でし山なり、今神^{かみ}祭り^{まつ}社玉垣^{やしろ}の内^{うち}あり、右^{みぎ}りに千田川ミゆる

黒雲

三つ鱗

肥後国高瀬の里梅ケ枝の社有、常此上に黒雲立覆ひ、浦風になびくと云ふ
日向国橘の音の瀬に逆鉾の社といふハ、神代の古跡にして玉垣の内に神龍の鱗三枚を神体とする神有、是を三つ鱗の社といふ

君ヶ嶽

佐渡ヶ嶽

雲生嶽

肥後国雲生嶽ハ高根山につゞきし高山也、多く真鶴住と云ふ、禁に濃錦里有り

佐渡ヶ嶽ハ稲妻の光り多き山なり、はるかに松の浦見ゆる

君ヶ嶽ハ信州松代に有り、此峰より落る滝の水、終境川の流_二入るといへり

常盤山

柏戸

滝ノ音

常盤山ハ肥前に有り、松の木多し、神木ハ玉垣の内に有、はるかに笠島鷺ヶ浜を見おろす高山也
柏戸ハ兩國の関也、門内に大なる柏有り、依て柏戸と云、むかし伊勢海_二住し鯨、猫又と成て、荒飛_二挟布里へ出て今此柏戸の関にと、まる滝の音ハ筑羽山の山崎々落る滝也、東関の古跡有とぞ

荒馬

黒柳

宮城野に生立し荒馬、舟橋を一文字に渡て南部の国_二至る、古今の上馬成りと云

黒柳ハ筑前の遠山_二有り、追手風_二なびきて今大木になり

御用木

玉ヶ橋

桐山

豊前ノ国乙女川の堤_二ある御用木ハ、玉垣の内_二有り、左リ_二如意ヶ嶽・四明ヶ嶽見ゆる景地なり

川下_二玉ヶ橋有り、神代のま、成りといふ、今ハ玉垣をゆひ廻して人の渡りを不許

向ふに桐山有り、榊山のつゞきして獅子ヶ嶽の西なり、此所々荒井崎見ゆる

千年川

猪名川

猪名川の水_上ハ高瀬川といへり、左リ_二関谷野といふ原あり、浦風に吹おくられて、瀬あしの早き流也
此川つゞき_二昔大蛇のぬけ出し跡とて、大蛇潟と云し所有しが、今ハ宮城野郡に属して千年川といふ大河_二なれり

秀ノ山

岩見潟ハ秀ノ山の禁の浜あり、はるか北山見ゆる、神代のむかしあまつかせふおこ天津風吹起りし時、此岩立しとなり、依りて立神とうやまひ今秀ノ山にうつす

不知火

不知火ハ肥後国筑紫ニ有り、戸立野・濃錦里見ゆる、沖中ニ黒雲起る時ハ汐道白く成りて川の如し、是を白川と云、浜辺横綱の社有り、祭礼春秋晴天十日湊の群集なす事おびた、し

土俵山

頂に野見宿祢の宮有り、開山明石志賀之助、晴天六日の開基、寛永元子歳なり、暫く中絶す
中昔開山 雷権太夫晴天八日の開基なり、安永七辰歳より祭礼十日と成る、山の高さ三尺余、廻り三間四方なり、俵をもつて囲之

四季の柱

四方の角に有り、四色の絹をもつてまく、東西に役柱、筆頭の宮・筆脇の宮有り

四神の社

四方の躰口の土俵を祭る、右ハ青龍、左ハ白虎、前は朱孔雀、後ハ玄龜也、残る十二俵ハ子より亥の十二支を祭る

三役の社

役柱に安置す、上に八幡の幣を立、弓の宮・矢の宮・弦の宮なり、今ハ扇を以て矢にかへる

二十八宿の宮

柱より柱まで七俵つ、四方合せて二十八俵を星に祭なり、△力水の井、土俵山の禁にあり、△化粧紙の雪、土俵山裏の方にふりつもありて雪の如く力神を安置す

棧敷ヶ嶽

見物山をなして勝角力に衣類の花をちらす、手を打悦びの声をあげる
こと雷の如し

土間の海

棧敷ヶ嶽の禁より土俵山の禁迄一面の海なり、見物浪を打也、大入の時ハ大波一面に打事おびた、し、本中鳥むらかり出て是をせいす

(ママ)
仕度部谷

棧敷ケ嶽の後の方^二有、関鳥集りゐる谷なり

中売村

此村の人々手ぬぐひにてたすきを掛ケ、人の肩を踏^ふて商^{あきな}ひをなす

名物

弁当^{べんたう} すし 酒^{さけ} するめ かまぼこ くだもの

(ママ)
板木部屋

帳元山の禁^{ふもと}あり、一名三河谷と云ふ板木の桜多し、前鳥むらかりて勝負漬をあらそふ

名物

番漬^{ばんづけ} 勝負漬^{しょうぶつけ}

行司溜里

土俵山の禁^{ふもと}にあり、此里人惣上下^{しゆんきん}にて出勤ス

名物

差切りの団扇^{うちあ} 見切の水入^{みきり} いたみの眼鏡^{めがね} 立込の裕^{たちこみ}
上屈の足袋^{うへくつ} 下屈の中ぬき

相撲溜里 名物 まとふ梨^{なし} ひき桐^{きり}

土俵山の東西にあり、すまひ鳥勝木に集居る里也

しこ踏石^{ふみいし} 塵手洗^{ちりてうづ} 立合の辻^{たちあひ} 何れも古跡なり

○畳加田^{たたかた} 土間加田^{どまかた} 棧敷加田^{さじきかた} 太鼓加田^{たいこかた}

此田のくろにはたら木多く繁る也、吞太蠟といふ蠟燭を商ふ者多し

木戸の関

御役山の禁^{ふもと}に建し関也、堅固にして切手なきもの壱人も通す事なし、組頭其外年寄出役なり、裏木戸出ばかりをゆるす関にて壱人役也

大札場

毎朝棧敷方・土間方へ切手を出す役所也、年寄・帳元出勤、晴天札持来る者ハ此所にて切手と替通用す

新札場

諸見物此所にて切手を買取りて木戸の関を通る
出役年寄なり

太鼓櫓
たいこやぐら

毎朝正七つ時より打初メ、夕七つ時に終る、天下泰平国土安全と打也、
禁に庵あり取組の札を出す
ふもと いはり とりぐミ

五柄太鼓
いつからだいこ

初日前日に町々へ出る也 江戸太鼓 深川太鼓 品川太鼓
しよにちぜんじつ えとたいこ (が脱方) ふかハ しながハ
あさくさ よつや

稽古堂
けいこどう

相撲年寄の家々に在り、関鳥・前鳥迄毎朝群り集て修行す
すまひとしより あ せきとり むらが あつまり しゆぎやう
ほんそんはちまんたいほさつ まなかな すなやま いたゝき へい たておき きよ しは ちから
本尊八幡大菩薩也、真中成る砂山の頂に幣を立置、清めの塩・力
の水むらかる鳥是をいたゝく
ミづ とりこれ

張合井 面白井 火の出る事あり
はりあみ おもしろみ あせの水わき出る事おびたゝし、
あせの火の出る事あり

撰者 談洲楼 立川焉馬(紋)
せんしゅうろう たてかわ 焉馬(もん)

画工 国貞改 一陽斎 豊国(紋)
えいさく くにさだ ひとひら ほうこく(もん)

相撲名所図絵 二編 近刻
すまひめいしよずゑ

立川焉馬編

当世 金剛伝 全二冊
たうせい こんかうでん すまひ

国貞改

歌川豊国画

当世相撲東西一百人の肖像をあらハし、各生国・師匠の名よりして、
是迄の改名をくハしくあげ、又、末二団扇等をことごとく生写しにな
して、聊かたがふ事なし、相撲好きの君子かならずしも見すんバある
べからざる冊子也
たうせい すまひ せうぞう せいこく ししやう しゃううつ

いろは引 俳字袋 小本二冊
いろは いじぶくろ

俳諧に用ふべき文字をいろは別ニなし、一々其きらひを加へたれハ俳席
などに懷中して至極重宝の書なり

立川焉馬編

力競 相撲取組図絵 木村庄之助校
りきやう すまひとりぐみづゑ

全一冊 歌川国貞画

古代相撲の絵、横綱の人々の肖像并四十八手の図を委しく記して、角力
好の人々喜の一卷とせり

古今おと落しはなし
秀句

新刻画入一冊

此冊子ハ古今俳諧の秀句、種にせし新作の落しはなしにて、元より勸善懲惡のをしへにちかく、幼童の成氣を覺すに妙也、禁句さし合ならて御手玉ニも相成、面白き本也

教訓をさなせんじもん
画入 幼稚千字文

中本一冊

此書ハ忠孝をはじめとして、専ら童子のをしへとなるべき文字を千文につゝり、一々講釈を加へたる絵入の小冊なり、稚き輩常ニ熟覽して有益広大なるべし

天保十六年乙巳正月新鐫

南伝馬町壺丁目

東都書肆

頂恩堂 本屋又助梓